



朝夷巡嶋記

第四編

卷三

春

庫書	108
5	30
188	169
40	號番
	數冊

~ 13
3093
18



吉田屋



吉田屋

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之三

東都

曲亭主人編輯

浮雲の富貴草

濡衣乃弟古鳥

中輯第二十五

却説文字撮ハ必ツモ外多ク。時夏小説動され心頻々安ラケバ
 遠く小浴廬をゆく。おの局へ退り。うち髪を眉帚小おの顔を
 塗り。化粧。果て結髪ハ人小任。鏡臺小對へ影とこれ二人後中
 一人梳頭の婢兒の智恵も此彼と三人合さ。文珠鬘聚。融す後
 毛の何々怯ま。後髪際を運熟せ。櫛の齒ふか。あひのあ。も
 誰。黄楊の長柄櫛解て。釋ぬ謎。ハ。釣毛。心。結
 の落著ぬ胸小湛。鬘水も洩く。汲。虚言。欽實。更。り。せ。

昭和九年
 七月二三日
 購求

仇人をいぞ知らんとかふく小ぢひひの櫛笥の蓋のあけていらぬ身乃
 吉凶の凶祥のあふくがう成衛りのと髪袿の神のあふ後がひつ小
 ちく羽衣の身と今さう小悟らぬ世小ひつまでう在と忍ぶ鮮衣の
 飾整ふ時を程し多のひり程は文字掲へ胸の苦勞と黒髪を既小
 結さ果しとる疑ひを釋しとるま且枕をとりて裳衣を
 被さる臥とる居て只時夏小ひられし成のあくと按さる小
 最上の川は使ふ鶴の已が腹を肥さんとい人の為小鮎を捉る喙小
 傷ささひそと被さる何曾へりあさん夏のさる成推さる小鶉鳩ハ
 これ鶉東二さん鮎ハ吾侪をいふさん渠ハ玄歳の玄雷月吾侪を
 けけとる。洋人時夏小下さる小ひつをむその程さる召返され後竟小
 その人は逢さる比さる殿小任諷しと文字掲を追退け刀野太

郎小賜ひと卒介とせうと殿はつと聴しとる渠又は匿姫を
 のく吾侪小代んとつとるもそれ今小変ゆとこれ小鶉鶉東二ハ
 吾侪を憎むとある人の竊小告しるもの加旃頂日ハ渠御氣色と
 蒙りと閑籠さるをまがら諫書を進せと殿の軍を外の奥
 ちうとの明しとる。さうとゆり。その亦吾侪ある小殿ハ
 道興と蹴りあふと故小やあさん然ちととその言を用ひ
 らしねがひとる。吾侪を憎むとる増んかうひとるのさくも當ら
 ころう小仇人の鶉東二あり。其をいちを御せと吾侪ハ遂小渠さる小
 害さるるやとある。さる小被浴室郎ハ各さるやとと殿と恨
 情あふとと吾侪を恨めると思ひ小。さる小猶も
 誠を盡さん再び物成按さる小刀野ハ敗軍の咎なり。今雜兵追

降らまゝ。その恥をうも雪んとく。吾侪小舊怨を棄く。厄を告仇と告
 言の報ひ小執成と憑んとその所為まゝべし。あつらんま今更ふいと痛
 ま死くふまんそれかもあまうや人まあ告られども彼鶴東二か
 飽ちぞよ吾侪を憎しとありハ吾侪も豫より知まり。せんをべあん
 と胸ふく成漢の白波立騒ぐ心ひとり鎮めても有撃女子の智惠の
 海深死伎倆を浅ちく小解得し謎を枉律日の神と竟ふ知らずり
 けり。折しとあま鼓らく少女二人まど遠く走り来つ文字撮の方ちり
 まはる殿の居せあふ小まん誘めといそらせん文字撮鮎く身と起し聊
 勞ふしあまそ。其を養んとほる程小平日より時の後れらぶ。さしとち
 待せまひけり。おん理りふけりか。さんとく袿衣脱更とハ童女ホがまろ
 ぶく並厝る廊下屢裳掲く先小立金蓮の步唯鶯乃浮宿の

床を離らる件の少女共侶小後廳へ赴けば経任ハけりもと舞妓歌
 唱駁集合と酒宴既小酣えこれバ郢曲煩むの艶死ら合奏の撥を
 揚まる石積の飛泉鼓々とく山巖を撲くと疑色垂袖歌舞乃燒
 る仙蝠の扇を翻せる江天の雪霏とく風小糸糸とく怪る況と
 美酒珍饌の衆ヨまある肉を丘と酒成池とと彼鹿臺の象牙
 の箸又朝歌牛飲の觴具足らむといのとあるまば汎紫の磐井が
 富むと尚屑とせむ伊豫の純友が驕るもいまど飽ちと心ひある
 べ既小是花唇柳腰百の媚ある淫女ホも後まく来ぬる文字撮が
 主の邊ふけるよ及びく花のうらまる深山樹あらてからむ優おと
 誰ういらん僉色まれが如くあまん経任いと興小入く右小この慈父妾を
 挾み左小琥珀の不皿を廻らす。この傾けら又浮くま強飲乱醉時成

程ちやう。文字ふみ搦なが膝ひざ或ある枕まくら小このこをを醉よめ臥ふ。當下いま文字ふみ搦なのの婢こひめ兒こ們ら。密語ひそかごとのの皆みなそのそののの或ある臥ふ。主ぬしのの裙すそ小こ衣ぎ或ある被か或ある盃さか盤ばんをを運こひこ納めるる程ちやう小こ日ひかか夏なつののやや黄昏きんぐわん小こあありり。更さら小こ間ま毎まい小こ許ゆるままるる燈とう臺だい小こ火ひをを點とも。幾いく枚まいとと形かたち長なが廂しやうのの兩りゆう戸こ。繰く出で。物もの々々整ととのへへ後のち會あひあひあ文字ふみ搦な小こ暇ひまをを告つぐぐ。各おの々おの局きゆう。退ひ。初更はつぜいのの比ひ経けい任にんのの醉よめ醒さ。ととんんままのの程ちやう。これこれのの熟じやく。睡すいままりりんん膝ひざをを貸かすす文字ふみ搦なのの舊ふるのの俚ら小こをを渠みち何なにるるをを歎なげくく。くらくらいいととるる色いろつつれれ面おもて色いろささるる或ある訝いぶかからら。かかをを身みとと起おここ。片かた頬ほとと拭ぬぐひひ嚮むかひひこれこれ大おほ醉よめとと汝なんぢがが膝ひざをを枕まくら小こせせ。をを知しららずず。そそのの堪たぞぞかりり。ほほんん小こ身みをを動うごかかすす覺さるる或ある俟まち。今いまふふををめめぬぬ實じやく情じやうああらら。ああららろろろろるるほほろろるる今いま一ひと滴たつのの花はなのの露つゆ。かか面おもてをを撲う随ま小こ敬けい馬ばははええ。汝なんぢをを

ここのの眼め中ちゆう小こ涙なみだをを含くみみ心こころのの憂うれああらら似にたりり。ああらら知しららずず。ここのの面おもてをを濡ぬせせ。汝なんぢがが涙なみだささるる或ある或ある涙なみだささるる。ああらら余あま小こののひひがが死しににああらら。ああらら明あくく地ち小こ告つぐぐ。とといいれれ。とと泣な沈しんむむ声こゑ。ああらら鶯ういのの諸しよ羽う濡ぬるる。驟しゆう雨う。絞しぼるるむむららのの袖そでのの隙ひま小こ目めをを拭ぬぐひひ頭あたまをを擡た。ああらら肉にく小こああらら。色いろささ外あは小こ見みまま。怪あやままなならら。苦くるくくゆゆかか。苟う且かつああらら情じやうとと稟りやうとと花はなやや才さい小こああらら人ひとのの嫉ねた妬まもも大おほ。ああらら寵ちゆうをを争あひひ幸さい成じやう。羨うらやむむ女め子ことと然しかももああららをを妾めかけ小こ異い形かたちのの仇あだ人ひとををりり。とと生なるるをを徑みち任にん。ああらら汝なんぢがが仇あだのの何なに人ひとをを為なすす小こ日ひはは其そののの仇あだをを殺ころすす。告つぐぐ。ああらら後のち方かたをを見みええりり。声こゑをを細こうう。ああらら向むかせせああらら。今いまのの匿かくむむべべくくもも侍さむらいをを妾めかけ小このの殿どののの軍いくさ師し蘇そ塗と鶉う東とう二に暴はら道だう。渠みちいいらら。妾めかけ小このの憎にくまま。ああらら時とき夏なつ小こ妾めかけをを賜たまへへととそそののうう。或あるのの筐か姫ひめをを薦すすままらら。ああらら又また頃ころ日ひハ

渠外えいありきくちち龍りゆうまき居いまら。諫書せんしよをま献けんしる。刺殿せきでんの奥おくなりく。みん
 遊樂ゆうらく小耽せうたんしる。あらみか文字もんじ撮とるべ。所ところ為なるま。入いるま。人ひとをま亡なすま。御遊興ごゆうきやうの
 根ねをち折しるま。忠臣ちゆうしん小あこむま。賢けんとらくま。あらびく。小こ刃やをま磨こるま。隙ひまを
 窺うかがふま。正ただしくま人ひとの告つげま。浅あきま。限かぎとらくま。多おほくま。ひま。入いるま。人ひとの怨うらみとらくま。御宗ごそう
 之これ難がた多おほくま。渠みちの智ち恵え人ひと小勝せうとらくま。計からま。長ながくま。あらびく。了しやうすま。軍師ぐんしあり
 せま。計からま。命いのちをま其その如ごとくま。小こ墮だとらくま。小こ側がわ小こ結むすとらくま。
 今宵こんしやう限かぎりま。小あこむま。有ありま。懸かりま。小こ多おほくま。ひま。定さだめま。とらくま。名な残のこりま。惜あはれま。
 哀あはれま。小こ月つき小こ塞さい不ふ覚かく不ふ涙なみだとらくま。落おちてま。面おもてとらくま。汚けらま。軟かくま。とらくま。越こ度たぎとらくま。
 小こせん許ゆるとらくま。時とき夏なつがま。けら。謎めをま。解ときま。言こと葉は巧たくま小こいま。廻まわりま。これま。
 解語かいごのま花はなのま雨あめ散ちるま。如ごとくま。歎なげかま。経任けいじんとらくま。成なりま。隨まりま。又また頭あたまとらくま。
 傾かたむけま。尋思じんしとらくま。久ひさしま。呵あはれま。とらくま。笑わらひま。文字もんじ撮とるま。みま。かま。てま。ひま。とらくま。

暴道ぼうだうのま比ひよりま。かま。こま。をま。をま。りま。とらくま。諫せんとらくま。諫せんの中ちゆう小
 文字もんじ撮とるま。のま文ぶんのま字じとらくま。いま。ひま。いま。りま。をま。渠みちのま余あま小こ仕しとらくま。年とし来きたをま。歴かくま。
 けま。主ぬしのま為ためとらくま。余あまがま。愛あい妻つまをま。亡なすとらくま。計からま。死し後ご渠みちとらくま。
 小あこむま。くま。くま。ぬま。夏なつをま。欲ほしま。とらくま。汝なんぢのま深ふか窓まど小ありま。渠みちのま閑ひま龍りゆうられまく。
 宿所しゆくじよ小ありま。慮りよりま。小こ足あるま。のまあらびま。汝なんぢがま。為なるま。小こ人ひととらくま。命いのちとらくま。竊ひそかま。暴道ぼうだうとらくま。
 防ぼげま。んま。公こうかま。とらくま。とらくま。尉ゑいとらくま。伏ふ拜せいとらくま。巖いわ鷲じゆのま山やまもま。數かずとらくま。ぬま。高たかれま。君きみがま。
 御恩ごおんありま。就つとらくま。又またひま。つま。心こころ苦くとらくま。時とき夏なつのま罪つとありま。浴ゆ室しつ郎らう小こせま。
 渠みちのま何なにとらくま。妻つまがま。浴ゆ室しつをま。隔へとらくま。其その声こゑをま。傳つたへま。とらくま。とらくま。とらくま。
 渠みちのま何なにとらくま。とらくま。妻つまのまこことらくま。羞はぢまとらくま。んま。やま。君きみとらくま。とらくま。とらくま。計からま。とらくま。
 渠みちのま経任けいじんとらくま。領りやうとらくま。とらくま。理りとらくま。時とき夏なつのま罪つとありま。罪つとありま。とらくま。亦またとらくま。功こう
 渠みちのま小あこむま。とらくま。近ちかれま。小浴せうよく廬いろうのま役やくをま。免まとらくま。とらくま。團だん奴にとらくま。とらくま。徵しやうとらくま。とらくま。今いまとらくま。

小決めごと。渠ホグと人まぐらふと入る。更闌し。おれと寝ん誘
 とむる。小光仲が陣中。時疫よ。死するもの甚。且その兵
 六猛虎鐵盾矢藤五重連珍浦五十五六方相。踏犬吠又陰行ホ
 連署。経任を諫る。某ホ頃日。間諜者をり。敵の虚实と
 扱。親ま。小光仲が陣中。時疫よ。死するもの甚。且その兵
 糧乏く。形り。進退難義。小及ぶとい。便是天の祐。所。より
 龍衣。敷。び。れ。の。え。あ。る。と。も。君公。後。堂。小。の。ま。ま。や。ら。故。小。士。率。の。つ
 小。台。心。り。く。戦。み。の。た。ろ。あ。り。を。や。正。廳。又。出。あ。り。く。軍。議。の。憲。術。と
 多。る。が。幸。ひ。甚。く。と。ん。と。を。書。り。る。経。任。を。こ。ん。て。已。て。成。は。る。と。軍
 議。の。席。小。先。ん。と。る。時。文。字。掲。を。召。近。つ。け。日。是。云。云。の。義。ゆ。り。て。お。く
 敵。を。襲。ん。と。欲。む。然。バ。こ。の。序。ど。り。く。鬼。六。ホ。と。密。譚。し。汝。が。仇。の。真。偽。成

探らん。か。と。い。ふ。小。早。暮。く。姑。く。樂。を。俱。め。あ。ら。う。さ。ら。と。心。を。放。し。く。
 敵。小。克。日。を。俟。必。ふ。の。成。あ。り。ひ。そ。と。叮。嚀。小。慰。む。バ。文。字。掲。涙
 さ。ら。と。い。ふ。堂。と。廳。と。か。り。と。い。ふ。も。か。か。り。御。館。の。内。あ。ら。は。る。心。を。ぬ。べ。れ。と
 ち。か。ら。あ。ら。ハ。快。樂。の。喜。見。城。彼。処。を。生。死。不。定。の。場。牡。鹿。の。角。乃
 束。の。間。も。お。ん。側。小。は。信。と。い。ふ。ま。ら。れ。こ。の。日。を。い。つ。ふ。と。消。さ。る。と。い。ひ
 う。け。く。左。右。袖。小。顔。と。い。ふ。當。ま。は。経。任。の。ま。は。立。か。ぬ。成。鬼。六。ホ。よ。ま。ら。ば。く
 請。ま。く。る。る。や。う。か。小。ま。り。さ。係。程。小。時。夏。ハ。嚮。小。文。字。掲。を。謀。ん。と。く。
 外。ま。ら。驚。せ。り。その。折。小。は。あ。ら。う。彼。九。尾。の。狐。奴。が。遠。く。浴。果。し。ん。
 胃。安。ら。ぬ。故。あ。ら。う。渠。ハ。素。より。その。性。矜。惻。を。や。り。さ。立。息。を。釋。さ。ら
 ん。や。釋。の。あ。ら。う。修。羅。殿。小。鶴。東。二。が。る。成。の。え。ん。然。ら。ば。謀。行。り。と。い。ひ
 と。言。咲。く。又。その。次。の。日。を。ま。ら。う。こ。の。朝。も。文。字。掲。ハ。第。一。番。小。浴。し。ん。童

女ホウ声高く。浄湯を呼ぶ程。小時夏へ応と。父言く湯を溢るまらぐ
汲うけける。笈を文字掲えたる。

無火のむれ苦了。鴉の縄も最上の川小うけと。そと再之と。び

口遊ミさうぬさまわく。浴廬を出る。時夏へ風雅小疎う。歌とく

知るのちうねども。今文字掲が詠し。二十一字を致す。このふけ

る。この謎を。や鴉東二が。つこと解ほし。外外さう。これ小知

ま。歌ありん。さうさう。小速小事を行ふ。そら。めと彼暴道ハ

智あるのん。這奴小あ。とあ。禍。さう。才小及ん。さ。さ

か。や。ゆ。づ。れ。歌。と。その便を俟む。小徑任ハ軍議。請れ。内房。小

在。と。さ。り。い。ふ。婢。見。們。ハ。名。ひ。り。ま。く。且。く。暇。あ。る。才。小。さ。う。この故。は

け。の。五。人。二。人。々。う。ち。う。ま。立。く。浴。瀆。小。時。夏。が。火。焚。の。役。も。平。日。小。あ。ま。ま

を。中。果。と。この時を。も。虚。小。過。さ。何。の。日。あ。る。本。意。成。遂。づ。れ。さ。い。と。く

心。い。さ。う。く。准。備。の。一。刀。服。挟。と。庭。掃。の。小。僕。小。紛。庭。門。より。偷。入。内。房

の。光。景。を。窺。ふ。小。この四下ハ他木を。よ。ん。目。は。小。限。玉。幾。百。株。乃

牡丹園。中。ぞ。あ。ま。け。この花。あ。ま。ま。文字。掲。が。愛。つ。く。ゆ。で。事。と。あ。る。ん

と。さ。う。ば。ぬ。拭。さ。り。く。面。を。累。と。足。を。偷。れ。項。を。伸。し。遙。小。内。房。の。さ。成

小。さ。い。と。静。ゆ。く。音。も。せ。む。時。ハ。下。晡。小。志。く。夕。陽。小。色。を。ち。な。る。な。る

紅。あ。ま。白。あり。薄。あり。濃。あり。く。名。も。さ。ま。く。よ。け。さ。牌。小。心。と。む。れ。折

ち。ね。の。頭。ま。く。入。る。隠。さ。く。見。り。牡丹。小。狂。小。蛟。蝶。の。葩。を。ち。な。る。遠。る。が

て。く。心。も。鬢。も。ち。著。む。渠。り。の。ま。ま。い。で。ま。は。る。今。宵。臥。戸。小。潜

入。る。便。も。か。と。葉。し。く。恋。ゆ。め。あ。ら。ぬ。怨。の。寝。又。宵。小。合。し。く。寤。ひ。さ。か。る

折。り。文字。掲。ハ。稀。さ。る。非。番。さ。う。寂。く。夏。の。日。消。し。慰。め。う。移。り。く。む。り

漫小端居そら成なりといふは顔おもて郁おぼ々おと牡丹花ぎんぎんの風かぜのなちひくは薫かほりのちひといふ
 ありとありとありと側小わき竹たけの童女わらわをいんふりと年とし小こ一ひとといふは花はなのいちひも
 人ひと小こんごといふはいいといふはわわららくあらんどん香かほを来しと人ひとを誘ふは草くさ木き
 非情ひせいといふはもも廿日にじふにちの盛さかへ限りあり夕ゆふの雨小こ衰おとろぬ間一ひと枝えだ折やり床に
 ちかめん誘いざなひて庭にわ下くだ駄だを不さしの騎を扇とち披ひらく花のわり小近ちかつく
 程ほど小こ後ごれて一人ひと後ごひまるる童女わらわを招けし色いろ珠たまを頭のうち小且かつ花
 鉄てつをりといふは鉄てつを色さくのいろめく散さて花はなを折らるんどといふは来
 けりの文字もじ搦にらひのつままと小こ立た在あるべくもあらねば花はな小こ引ひき花ぞろ九く折せ
 たる花壇はなだんの下したを此れ彼とうち遠く花成な観みる花色いろも香も浮る雲の
 富貴ふき艸くさ無常むじやうの風かぜ小こ今いまを散る命果めい敢あるれるあら思ひかけるん

背せより時夏なつへとや寄近よつたと声をもうけど閃々ひらひと双ふたの光のろ共とも小こ肩かた尖とが
 一ひとと砍著きれば叫あつと魂たま消しる声立たさせと疊々かさ々と打うち大刀たいとうを外へと
 ありとあり身みを輾せば裳もも蹴くると下した襲おそひの白しろ綾あや帯おびの端はた之の黒くろ髪かみ之の解とけて
 糸いと々と大おほ叫あひ鮮血あざ溜たる身を起して人ひとと倭僮わらわく足も引せばあらびせ
 ろろ二ふたの大刀たいとう小こ霎しや時とき堪たむ仰さま小こ倒たる軀小こ乗のりからて刺留しりぞめと
 といふは程ほど小こ頬ほ被おせし時とき夏なつがみ拭ぬぐといふはともめく面をあらわれば
 双ふたの下小こ文字もじ搦にらひの絶とちとる声をあら立達たたる刀や野の太た郎らう仇あへ正
 志こころといふは暴あら道といふはといふはいいといふは不あ當あ事ことといふは怨うらみ成成なり隠かくれといふは

護^{まも}りて 容^{ゆる}み 經^より 暴^あらむ 道^{みち} を 擊^うつ 心^{こころ} 我^{われ}

猛虎

あつ道

時夏



時^{とき} 夏^{なつ} 花^{はな}
壇^壇 文^{ぶん} 字^じ
撮^撮 を 殺^{ころ} せ

時夏

文字



深き血を拭ひ捨腰小納め袖うち拂ひ遺るふ拭とて揚し復頼
 被ふくも造化高妙とゆふ暮小庭門よりを脱去ける。かりけれたこの
 知も母屋を去ると百歩小あまをく。加以入相の比るるれ暮舎鎖戸
 の音小紛れとこも或知るのちりけり。少選とて彼童女を花蓮花
 鉄を携つて舊の知小あまをく。何如ゆれえぬハ在らど是首欵彼
 首欵と索る程小文字搦の鮮血を塗れと花壇の下小臥れば吐嗟
 とむるも駭死叫びも。轉つ輾つ母屋小近つれ頻小入城呼と云云と
 告りも婢兒們又更小駭死騒ぐと大之形も復彼小告此は相譚ハ
 或ハ園小かく文字搦が亡骸を打ち返し或ハ人を走し経任小放り
 されぬも経任ハ神井鬼六と賊卒夥ゆく後堂小まの牙つ送恨中
 かりぬれも小且癖者を穿撃盡ま。當下鬼六も夥の賊卒小蕉火を照

さ存く隈も園を求獵ととも程歴り一とあるもそが蹟もぬ認
 まし。皆のつづふかや取衣ひぬ経任と或候つり。僉羨のふかあり
 やと問へ鬼六も懐より血小染もる字紙をさうゆ引伸し透しんく。
 経任がやもふさうあせ君公もるこれを尙せ文字搦が破れり邊小
 遺る物の只これのそらやと癖者が刃の濃血を拭しあり。あられも
 白紙あも幽小文字のんえ。まふのれふか。ふもるのれせん恨くも
 墨色薄く且鮮血小染もるこれが定ふは讀むゆとのふは経任のそ
 る。件の字紙をとり揚し亦燈燭より翳し。そんか。んくち魚頭
 軀も賊卒もと退し鬼六をのり間近くゆせ。猛虎これを何とんる。
 思ふ色のいと薄れ小知を塗抹し。まふ文義を知り。あられも熟
 ん。諫の状あり。あれハ是暴道が状の草稿小疑ひなり。かまふ文字

搦を殺せしめ候間むしと知る死のこ這奴この草稿を懐紙乃間小
入と式忘れしめ小身は著て遠く白紙と名の刀の濃血を拭の
まらん暴道奴へ才小諱と我意を建んと候癖あり。こきゆと名の合
まらばこの小竊小文字搦がこれ小云と告るる。あつたこと
猶さるるあつたことさのいふま忽せし故小遂は愛妾成喪り。這奴
憎むべし。腹をさし。汝ハ殺の士卒をぬく。暴道が宿所小乱と入りどく
首撃とくこと小見せし捕を逃しと。敦團々巻成捺。齒を切り牙を
震しとぞ怒り多。鬼六つくちややく。膝拍鳴しと嘆賞し。君公乃賢
察寔小當まら。兎憤も亦宜あり。まらんあまとも。寄名の軍兵間ひ
通る久く。柵外小在り。今兵を動し。躬方の大將を撃り。多敵小勢
ひ成添ふ他。且く愚意とあり。まらん明日度小假托く。暴道と詭引

しせ幕の陰小力士を伏せし文注所むし誅し。是是安然の良策あるん
但し暴道へ思慮才幹あるはまらむ。その劔法剽技も亦衆人よ提
まら。宜捕隊の大將を擇む。そが中小矢藤五五六吠又ハ皆
暴道と交り篤し。今この二頭領を除けと八時夏小勝めあり。その他ハ暴
道が敵小足らむ。某又その副とありて。時夏小力を勸む。暴道縦翅
あつたとも逃走するを。願ふ時夏が罪を宥めと捕ふ。乃大將よ
志多う。渠歡く粉骨と竭さん。かくその功あらん。小彼をり。此小
換ふ一個の頭領を誅戮し。又一個の頭領を用ると。是是君臣の幸
るべし。賢慮如何と真とて言詳小勸ま。経任この幾小後ひて。要時
怒りを刀心び。翌の捕隊の分配をみ。鬼六小任せ。抑神并鬼六と月
来暴道と睦し。又時夏を貝負め。其意小協は。其意小協は

鬼六時夏が圓山の館を攻落し信夫莊司を敷く。是れ暴道竊小隊
 兵を進めく筐姫を生拘る。是を經任小贈ふ。當時その功鬼六
 時夏本が上小あや。こまじり件の西賊將ハ暴道をいつ恨り又時夏ハ
 この春やむ。鬼六が副將より小暴道が鎮守府も。故城を成る小及
 ひく。その副將小せしむ。時夏ハさへ鬼六も亦こま或飲いどこま。乃
 猜忌あや成り。龍蛇茂林の敗軍の比只鬼六のこ。經任を諫寛て時夏
 死を救ひ。今又渠が為小勸解。捕隊の大將小薦揚け。是れその同
 氣相求め。巴小勝を已む。小人の奸智又出る。かゝる類ヨク人ハ
 况賊將のるハ。あま便是毒をり。毒を征するも。いふべ。人間話休題。
 蘇塗鶴東二暴道の敗軍の外口小。のり。ち龍をね。量。小頻小
 状を進め。經任を諫。さ。用ら。くもあ。の。い甲斐。と。さ。

經任俄頃小後堂の遊樂を退け去て今朝と軍議を度と。灰小は
 一。原来諫言空。と。既。其の非を知らせ。つ。憑。と。終。ふ。よ。その
 次日。經任ハ使者を暴道が宿所へ遣し。敗軍の罪を免許。を。出仕
 さ。軍議小加え。と。い。え。暴道ハ欣然と素伏し。疑。を。恥。て。礼。服。を
 整。後卒の汰。候。件。の。使者。と。ち。れ。立。軍。議。乃。席。赴。程。小。垂
 幕。索。断。落。と。身。甲。も。暴。雄。ホ。む。と。見。と。出。御。詭。さ。と。呼。子
 々。暴。道。を。り。籠。く。左。右。より。組。んと。と。暴。道。ハ。こ。見。見。こ。些。也。騷。か。ず
 眼。成。瞪。無。礼。さ。そ。と。振。釋。死。再。び。寄。を。極。細。と。撞。と。投。退。け。襖
 小。手。煉。の。早。技。搜。を。と。と。瞬間。小。五。六。人。或。ハ。頭。を。折。裂。と。或。を
 足。を。折。う。と。生死。を。さ。ず。倒。と。透。を。窺。時。夏。ハ。鎧。衣。小。條。脇。甲
 膊。甲。と。裾。短。小。打。扮。ハ。短。柄。の。鋒。を。閃。と。也。と。声。け。衝。出。と。成。と。わ。

とる。と反揚く。左身成掛る短刀を抜間あせむ。又肉を鋒の柄細く
 動せど鋒頭を抜る坐敷の秘術怯むを透さず。幾矢と投げ鋒の刃
 尖小時夏ハ股成縫きく撲地と坐る。暴道得る。と刀を引抜死破んと
 進む後より。走り鬼六が短鋒小膳申れく。小膳を突立引禁を
 怒る声をふり激し。と時夏は賣れたん。修羅殿竟小嘘ふく。
 忠臣を殺し。又この柵を有えやと。敦圍間小時夏を股に立し。
 鋒頭成抜捨刀を杖小身を起し。足を引く。暴道が背のより進
 する。と。鬼六を響時夏が罪を赦し。金瘡保養の暇をとせ。猶も怒小堪
 ざるけん。暴道が首級と蹂躪て。その隨小罵り。僅小憤成散をのり。死
 せし文字榻返り来へん。小あがさ。不鬱と。樂をこれより。寄ぬの

陣を襲んと口ゆいど。ゆる後一日。こと懈り。不題鐵指矢藤五重連ハ
 此度経任が時夏を救い。用ひく。俄頃。暴道成殺せし。成らる。ゆる
 なる。と。暴道と睦む。鬼六が野為ゆ。あんと。猜せし。経任が。後憑
 一が。夏の難義。不及ぬ。前小脱と。去んと。尋思。後の謀と。あんと。ゆる
 経任が。この。来石室小秘藏せる。一卷の魔書。あをけり。矢藤五重連
 偷取く。脱去。げ。便を俟。恒小用。ぬ。石室。と。秘書の失せし。と。知
 の。ゆる。矢藤五重連。一日。軍議の序を。ゆる。経任。小。厨川の柵ハ
 當所の根城。ち。暴小。跡。犬吠。又。が。隊。兵。成。物。て。小。參。り。後。其。が
 第。る。象。子。彈。平。太。負。持。數。百。騎。小。將。と。今。る。不。彼。れ。を。成。れ。り。彼。彈
 平。太。ハ。年。尚。少。く。勇。悍。餘。り。あ。と。謀。慮。を。寄。ぬ。の。大。將。光。伸。ハ。素。より
 武。略。小。長。し。の。久。く。この。柵。を。用。と。絶。く。下。の。攻。撃。を。受。け。る。後。を。

龍巻ん為るまむや某浅智短才もど厨川小赴れく弾平太小力と勲
 彼知を成らん過失あつたこの浅智と真実しげは速まが経任大死小
 悦び重連が遠謀が意は稱へて汝が厨川を成らんまこれその日より
 後中をけんあつたま多く兵をどうち遣し難し只その私率のまをねて夜は
 紛まて柵を歩み日れ術をのく汝を助けん準備をせよとぬそが例の契と
 倫与小免矢藤五の欣然とて件の契を受納めその夜更蘭て服心
 の賊僕五七人をねく潜る後門より出る程小経任の幻術をのく天城
 墨をく風を起し竊ふこれを資し矢藤五ホを障る寄りの陣前と
 うち過る厨川と投く走る夜を日小續ぶみそくみくを彼知小
 来著し象子彈平太負持小對面しく又偽る使者と稱し更小経任が
 命を傳へく平泉よる數度の戦のゆるて矢種甲曹之くまぬこれ小

ちやと當知は野らまる軍要金二千兩を召るんとく某は適与りあ
 と真し小演説しく件の契を證據とせり彈平太ハ頭領する鉄指
 矢藤五が使者よ立て主命を傳るぬめく一毫も疑はざ一日矢藤五と
 留めく叮嚀小餐食た次の日三櫃の軍要金を適与小免矢藤五ハ
 あり後卒ホは扛擔しつさぬ容みく彈平太ホは辞し別は経任も
 まどまらふけりこの後西三日を經く平泉よる石室の秘書紛失
 の露頭し又矢藤五の厨川の柵を成らぐ二千金を略奪して逐電
 せしやゆえに経任を蹉跎しく罵り憾めませんまあこの比又
 誰のふとあつた文字撮を殺せりこの時夏くと風聞をり経任はこれ
 疑心生り又彼血は染る字紙を檢る小暴道がる亦小似とまも
 覺ると小似く非なるのえ只疑をよるのまらま又文字撮は使れる

亦を搦捕し。責つ賺し。問究る。小夏が文字搦し。いひ。又文字搦が。俗廬にて。海を敷の。初々分明あり。一。原来を。時夏が。死に。仗柄。乗せられ。文字搦の命を。暴道も亦。誅死せり。程も。二。入。躬方の大將と。ぬ。後悔。更。怒。堪。程も。二。入。躬方の大將と。誅戮せ。躬方へ。叛。敵。笑。折を。俟。時夏を。八。創。斬。切。文字搦と。鷄。東。二。亡。靈を。示。且。怒。を。心。ひ。けり。か。ア。程。時。夏。ハ。惡。評を。傳。心。の中。敬。馬。怖。肚。裏。亦。不。か。謀。成。就。舊。の。頭。領。と。修。羅。殿。小。説。亦。義。邦。を。殺。と。心。小。夏。を。責。を。肩。い。ま。便。を。問。又。露。頭。を。小。入。の。人。小。夏。を。竊。小。階。成。規。と。逃。去。ん。と。金。瘡。を。愈。不。無。龍。を。程。小。鬼。六。も。亦。時。夏。が。風。聞。を。傳。心。

竊小安。小夏。時夏。罪。宥。小風。聞。い。實。修。羅殿。吾を。疑。ひ。時。夏。風。と。狂。く。逐。電。と。赤。い。解。小。由。り。彼。奴。と。走。を。腹。心。の。私。率。し。守。せ。り。

中輯第三十六
陣營の水 磯 盃
岐 塹 の 淨 器 舟

力を。城。と。攻。る。の。力。と。傷。多。く。智。を。敵。を。征。る。の。利。あり。小。害。あ。り。然。ハ。賀。藏。人。光。仲。ハ。既。小。平。泉。の。柵。小。寄。せ。れ。猶。且。矢。石。を。食。賊。の。懈。侯。く。敷。ん。と。日。と。過。せ。任。果。と。退。屈。と。遂。小。放。慢。の。生。一。防。禦。を。賊。將。小。任。用。後。堂。は。淫。樂。と。問。謀。者。の。告。一。柵。と。攻。ん。猶。其。の。虚。実。と。問。究。る。程。小。時。ハ。暮。春。の。季。を。け。時。疫。と。小。流。行。士。率。日。く。

病臥をりの枚擧ふ不遑あつた。光仲ハ且ク攻撃の機を先
 むづろ陣中をうち巡り病を妨ひ薬を与へしむ心状用止とも瘥るの
 絶れ傳流りのヨリ首と並ぐ死ざる稀現陣中ハ療治保養小
 便か。光仲を憐れ新小附後の一兵の病臥をば五人三人ハ潜小復
 扶乘し郷里へ送遣。又遠く後ひまの士卒を鎮守府の城遣ら
 本復の後參會ふと下知けるこの故ふちあ千五百騎とゆえ一も僅小七百
 餘騎小あふ中ふまう二百餘名ハ病疲々の役ゆら立ざるのみ只
 幸ゆと摠大将光仲以下佐味下河邊城戸水草の數輩ハふる恙ふれも
 ち天運の踏しむる初彼此。郷士野武者小附後ひく俄頃小
 勢ふち日小兵糧を費すと亦まこれ小。廣綱もその意とゆ
 を鎮守府より糧を續ぐおと久し柱ぐとあね光仲廣綱の連

畧小佐味高利加判し屢國府へ使者を遣兵糧運送の催促等困るは
 守護頭人ホ光仲の功を相けん事小假托くその催促小後ひくは
 程小春去る四方の八重山翠増を夏のためふる小。舊穀ハ已に竭て麥ハ
 しまと食ふ夫食小物ハ綱をり光仲も今さ糧を取ふ小方さして
 士卒飢渴小及んと遠くゆえける時小四月十二日光仲ハこの早下河邊
 高吉を召近つて兵糧のヨリ少を問小高吉答くさ小今練小有してろけ
 一子日ゆ餘りあり翌日の炊火足るべくもゆらと度既小難義及及り計へ
 もやといひけく歡息を光仲ゆらち點頭も亦豫さる。さあんと
 一あて就て火急の一説あり城戸四郎武詮を召べ別亦軍議ありこの曠昏小
 諸將士本陣小集合と隈きつて狗より期及く説示さん。と
 立高吉ハ果て外面へ退る。少選と城戸武詮来たると

光仲ハ左右の人を遠ざけ、武詮ふらち對ハ和殿を招き、別議ハ
 兵糧既小竭、士卒飢渴、及んと、和殿ハ國家の爲小死ん、款又身乃
 爲小脱、ん款と問、武詮、あ、氣色を變、く、言を激、し、尊向、と、
 逆賊の、滅亡、せ、私怨、の、報、ふ、と、成、給、む、綴、糧、竭、て、土を
 食、ひ、泥を、啜、る、小、至、る、も、進、く、柵を、攻、ん、と、欲、を、富、足、く、壽を、有、ち、玉、成
 炊、ん、食、め、と、申、下、歩、も、逃、ん、や、さ、ろ、ろ、乃、び、る、を、御、意、と、高、か、小、怨、を、
 光仲、莞、尔、と、ち、咲、く、こ、こ、その、義、勇、を、知、る、所、以、小、印、を、和、殿、と、招、け、
 今、の、言、ハ、戲、れ、の、こ、こ、不、守、宵、柵を、攻、く、運、を、試、ん、と、云、ふ、和、殿、と、も、や、
 隊、兵、三、十、名、を、お、く、竊、小、近、郷、と、赴、れ、車、十、四、五、輛、を、求、く、藁、囊、裏、小、燒
 草を、籠、め、三、が、一、少、火、藥を、籠、め、兵、糧を、積、め、車、の、如、く、小、走、り、
 日、暮、後、小、時、刻を、考、三、十、名、の、隊、兵、小、件、の、車、を、推、さ、せ、四、更、の

比、及、小、陣、門、小、到、賊、徒、遙、小、これ、を、見、ぬ、兵、糧を、奪、取、ら、ん、と、
 走、り、め、こ、れ、又、水、草、太、郎、五、小、謀、を、授、け、藁、の、兵、を、出、し、款、と、遊、り、車、と
 救、小、如、く、偽、肩、て、逃、走、せ、ん、賊、徒、ハ、兵、糧を、食、と、逃、走、追、り、車、を、奪、取、
 引、入、れ、と、さ、る、ち、と、その、と、和、殿、ハ、度、熟、く、士、卒、十、名、と、約、し、と、神、識、を
 擡、遣、棄、賊、兵、の、中、小、雜、り、柵、中、小、紛、れ、入、り、件、の、藁、囊、裏、小、火、を、放、り、城
 櫓、を、燒、き、城、門、を、開、け、亦、その、火、光、を、暗、號、と、し、發、る、と、賊、風、乃、如
 く、走、る、と、飛、鳥、の、如、く、士、卒、を、進、め、柵、を、抜、ん、走、り、も、賊、徒、小、謀、を、知
 覺、し、柵、を、破、り、或、ハ、擊、つ、と、出、る、と、の、と、彼、幻、術、と、り、月、を、掩、ひ、天、を、暗、し、
 和、殿、小、柵、入、る、と、を、見、ぬ、天、日、直、成、亡、き、幸、而、て、謀、る、が、和、殿、亦
 紛、れ、柵、小、入、る、と、賊、徒、小、號、語、を、聞、く、他、の、共、同、賊、徒、認、て、其、が、の、
 如、く、柵、中、小、入、る、と、火、を、放、小、及、む、と、火、を、放、小、及、む、と、賊、徒、小

知る事なき生々々々人の一人もあらずと見九死一生の苦計之智勇全き
 の小あざれば行ひさかざし。和敷を擇用ふ武運の長短この
 舉にありとてと説示せば武詮感佩と異説小及びも欣然とて
 退たり。二十名の勇卒をおく潜て近郷ゆを赴たり。却説その曠昏より
 佐味竺内高利下河邊小三郎高吉水草太郎五昌之のさうすす
 頭ごちたる兵亦數本陣に集會し。地上小圓坐を敷並べ如く小無火を
 燒し。大將の下知を俟小光仲ハ時を殺さざざ實子の端小立歩く幕成
 掲せ床几を退け儲の席より程小衆皆も成無頭を低齊一これと
 敬とて光仲も亦礼を答へて衆人より對ひ諸賢時刻を違へず
 遺る會合せらる。故にこれより後あり。かどとて光仲が武運始終全
 くも是裏ゆり謀り如く經任怠慢の心成生く。みづから軍議を度と

せど坐小声色小耽りと諛言。信軍師暴道を殺せ。賊將矢藤五が
 徒脱するのヨリとて當小是攻敷へたの時あり。たれもいふせん
 陣中時疫小より死亡せしもの甚まか。この故小賊をその圖小入
 と父とも柵を攻る兵足なき。躬方の運の短き所歎まふ。小か倭は兵糧
 既小竭く明日の糧あり。鎮守府も亦如此るべし。さうば何知は食を求ん
 進退なく。究りぬ定小危窮存亡の秋なり。志は光仲ハ微賤より
 興りてこの大任を奉り且録倉の営中あく。對策の日兵糧のる。兵向き
 小某對く臣ハ兵糧の續ぶると成患ひとせむ。只經任が首を獲るの
 一日も速くんと成ちり。かまふ今國府より兵糧運送
 遲滞まじき。甚しくハ謹く。況兵糧竭す。何方小向て軍をかへせん
 餘人のまわれか。光仲ハ二騎より。今宵賊柵を攻敷く。克す。

潔く戦没せん是則上の鎌倉殿の武命を辱めなるともく次小廣瀨朝臣
の鴻恩小谷んと各位の事と異え九妻あり子ありの孰か企てその
戸毎又俟さうんや鎌倉殿への忠節を此度の役小限る小あふむかひ云んと
ちのめゆ身暇を取らざり。性命を全うし。後の國役は立たまへ光仲
も捨つとも一毫も恨ま。とく。といふせ。高利高吉昌之ホこ。は
彼あをど声を激し。情なきをそ。兼聖父家。心妻。子。別れ。刃。を
殺し。名。を。留。め。子。孫。の。栄。を。あ。め。の。の。武。士。の。常。情。を。吾。們。麾。下。小。後。ひ。と。
賊。を。撃。つ。め。め。の。愛。顧。を。蒙。る。と。浅。く。も。生。る。も。死。ま。る。も。安。危。を。ヨ。賀。殿。と
復。よ。せ。呼。ぶ。欲。せ。し。逃。れ。よ。と。む。む。軍。談。に。難。し。臨。て。免。る。兵。兵。本。意
と。今。更。に。誰。も。亦。達。死。心。存。ま。る。糧。竭。き。饑。小。臨。て。果。敢。り。死
働。死。ぬ。と。誘。え。共。侶。小。宵。賊。柵。小。推。し。け。鐵。壁。あり。と。打。破。し。

經任が首級を獲らば柵を首のく死せん。他更まきゆと辞せり。答
四下を信と見。目。せ。六。衆。皆。阿。と。嘆。唱。し。通。微。妙。く。い。ら。ふ。多。う。吾。們。願。ふ
所。三。君。の。存。念。と。同。じ。去。ら。ず。と。諸。声。合。し。或。ハ。矢。を。折。り。天。と。拜。し。
誓。言。を。示。し。必。死。の。覚。期。小。光。仲。う。感。佩。し。その。義。烈。を。頌。贊。し。諸。賢。幸。ふ
か。の。如。く。ま。る。と。六。攻。敵。と。難。く。と。い。ふ。と。血。氣。小。任。し。不。賞。小。進。を
謀。の。軍。を。ま。り。可。惜。命。を。損。さ。れ。小。あ。と。こ。は。聊。謀。あり。を。の。と。城。戸
四。郎。八。隊。兵。三。十。名。と。お。く。既。に。近。郷。小。赴。れ。り。その。謀。ハ。如。此。と。小。箇。様
箇。様。と。説。示。し。水。草。太。郎。五。八。百。五。十。騎。を。一。隊。と。し。柵。より。い。で。あ。る
賊。と。戦。ひ。偽。員。を。退。く。べ。し。又。病。後。の。本。復。せ。る。二。百。餘。人。陣。中。小。甲。り
守。り。徒。土。鑼。を。鳴。り。鯨。波。を。揚。續。れ。攻。掛。る。如。く。と。光。仲。ハ。佐。味
氏。と。下。河。邊。小。三。郎。と。共。小。三。百。五。十。騎。を。お。く。一。の。城。門。を。攻。撃。し。武。詮。が

計行どく火の獲る成んば食速は騎へん。時刻を今宵四更の比と定め
 二更の比に至るべし。卒飽やぐ食まへり。謀合期せむらひおのつく
 箸を取るときも既今宵限りふしをあらはれ將とあり士卒とありく
 生死存亡を俣ゆつと過世怪しき交り多きや。いづく最期の酒を酌ん
 とく土器をりてとどろと呼ぶと唯とと成り幕の内より西三人能く搦て
 劣るあり。小四方小酒杯を載る成りわく劣るあり。當下光仲へおのれまぶ
 毒試をせんとも酒杯成り小取て一口喫く衆人よりち對ひ陣中糧とと
 竭るふ。いづれ酒ありん水をりて代るもの。まを佐味氏へ憚せんと
 いひけく盡き盃を竺内受てうち戴き又高吉より昌之と次第よ
 巡る盃の影も隈なき夕月夜山杜鵑おちひり。西の天へぞ鳴りたる彼や
 冥土の友欵ともいひぬの躑躅やごんひど死天の山路へあるともふ越るん

の成とちあつく小死を究めたる兵の支と殊小憑く食悵然とけち仰げん
 竺内高利進み出現かむるもの酒宴小散まらぬ送憾。各位雲時等
 へ高利殺進せん何をぞと小頭を傾け扇を膝ふり上りこの酒へ素
 りと泉の水を且ぶ酌ども竭し御方の武運名ありあつる平泉を一呑又
 喫めめてと声張揚ぐ謡ひゆと高吉へ扇を披れく鬨の袖を翻し
 舞々真を添ふふ衆皆冷也とうち囃し光仲も亦笑片向く佐味が秀
 句を答へりける。説話分兩頭。いとも亦憂ふハ洩ぬ方あり。あはれと
 のゆめさへハ笹姫のうらまへ。今歳仲春圓山ゆく田を脱れ出るとは旅乃
 杖とを棄物とも憑くくろひ弱竹と鳩江ハたや途に驟まるとこが月賊
 徒小生拘るも経任が目前へ牽居られその日よと殊ある渠が恋風小麻呂
 松も操の命強顔く譴責らまるといそむくその辱めをも信夫の公羽が掃



かほとけ竿の志つのおよひ衣
志われともころ袖をかこしうぬ

月夜日編



みちおの川の
河水も酒とく
えのふけり

下河辺高吉

佐味世内

車身四編卷五

巾良人共信ふともわくもあつてとよバ憂るの數積り山雞の峯上瀾て
 音もぞ啼く良人へ獄舎ふとも亦龍小養まら訪ふつも紡るつりも
 奈迹波江ふあちをひらるる標心つりぞ果るれえんあれも文字標
 妬もく姫を拒し経任が又怒るも幸ひあつて甚しく強ひて然るりて
 許しもせどこの仲春の暮の日より経任更ふん中かろ心太死女の子どいそく
 懲りく熱腸を冷んごこの柵の西南なる塹港の邊兵成の兵を置ざれた
 塹廣して底深く岸險く墾印り内少松柏抄と争ひ外は緑波岸と
 洗り潜びて入んと欲するものも異なる入ると難く潜びて入んと欲する
 のもねるまはむとゆるまらど匡姫を懲さん少いも究竟の配所るべし
 さるとく俄頃塹港の内は一宇の艸屋を造らせく姫をこふ安置つて母
 日小舊衣十領を洗ふべし命にけるこれゆり賊卒四五名大なる盥

一箇と洗衣を乾くこと竿幾條秋て来つ匡姫小遊与ていそ和女郎が
 白く燭あつるそのひ足の力りりて水隠り下り立て毎日小駝の舊
 衣を洗ひぬぐと血盆地獄の呵責を受る卒死教をえんよる速く
 修羅殿の御意は後の紫雲の夜衣小包まら紅蓮の蒲團小乘せ
 らる安樂園へ往生せしう人の心を似るものもやが眼まはしく美人あま
 人のも美人あまらそ修羅殿のかくわふ執念深懲りのみあめ吾共も
 亦過世より殿と呼ぶ徳ありと和女郎が心は後つと出するつり死と
 みのる時の厄の良人の身を身代賣たりのもあゆ世なるふやよ
 義邦の為とち修羅殿は靡れまらせよあらの旋最まら
 立しうりのみもあまはく見えりあまをう噫笑止やと散動つ二
 の城門のかえ退りけりこれより後を朝夕の糧を送りと尙憚らる

謹んとも賊卒ホが日小ニ遍捧衝鳴りて来つるの之昏ハ終日松吹風と
 夜ハ通宵堰落を彼壘港の水音より外ハ言訪へのをなす憐むべ
 筐姫も熟ぬる業小栲食る衣をぞ賊兵どもが垢之血之被る
 せ衣いろとも解りなく鹽小載せ水際まで推りて遣るごとく苦
 死小下立んと踏かる登崩と苔深く岸滑小水高し落る筋
 論む身を投めろ後ろるる浅瀬うらみ細脛を濡せば寒死春乃
 水多るご揚る片足ハこれ似るかも白鷺の友は白も形死るく
 細布の一衣浸り揮濯けむも堪る入る岸の薄氷揺碎き
 さら浪ら水の丈をこる小膽絶瞑眩と人氣はる大江の嶺その
 鬼は捉らるる風流少女が解流ひのわをけんと刃をら小のわり
 と泣く涙の川をたのまらるる濡るる裳裾は袖を濡るる哀れ

まま下りの日ぬ衣の怨家の垢ハ洗へともが月の恥と良人の恥雪
 ともあつ栲ふも荒足を鏡列衣も磨ぬ玉乃顔も塵埃染た衣
 雪の膚解と乱る黒髪のみは艱苦も良人の為とあふ忍んと
 多くも竟る疲労果と十と定め衣の敷足が後ハ忽地徑任が便
 室の小庭小牽とせられて憂とと豫る音小竹く良人の呵責と目よ
 見せと人の憂ひを身の樂と小笑ひ戯る怨の数々復す力も鏢
 鏡は勝ぬ良人の命の惜さ小勸解と翌より又流る水温とさく春
 の日も花さるる日数経と夏もあけり香久山の山よはあぬ
 水際の松も衣乾らむむと不樂積る瘡小病著の重枕枕も許
 さるるの俣ゆく玉の緒の絶すと生憎と絶ぬ歎のあやとも
 とき時と良人白く卯茨開く四月十三日小ちるる痛く久あきの

翠帳の下小養は深窓の裏小人と成り良家名族の息女あれ
 ども今ハ賊徒柵中の院婦となり果て艸舎小むと置きて夜を
 殊更小物寂しく夜行の撃柝を遠く彼此又松風蘿月
 の外耳は觸れ目小遮るりのあり寝らぬやう小終夜佛乃御名を
 唱へて過去めり寶父母養父母親族家臣ホまてく戦死せしめ
 菩提を吊ひ現世めり良人の天運循環しく會替の恥を雪光絶
 てる家と興し廢てる受領を續せ久とぞ禱りける夜とて燈火と
 置くて成許さ終はる暗室小坐しく曉を俟の冬の日小あ
 ぶら枕の辺は雪を束ねて明を取るくもあはる夏ハやあはれど
 螢の影を人子バ窓小光を引小由あり今宵も満天は雲とるを
 仰上は真如の月高く昇り清光白屋の檐を照し入之は日か

ひとと壁小添ふと與共小お成るは水路近う弱段の風小
 戦ぐ秋鶉鶉の囀々し何の故小夜は寝らぬ青山遙小
 松声の枕は響く秋杜鵑の光惚ける誰か為小屢價を刀耳小
 竹くりの悲を増さるる目小ころの腸を断さるる怒雨を
 責て過去来とるひとては讐敵経任が残忍しく且性急を
 冠者を亡ひをさるる吾侪を随せんとの鴻許の所終るるれ
 屠所の羊とさるるをさるる不めん命恙るる不幸の中乃幸を
 吾侪亦彼が徴を容さる小糸るる靡くを俟んとるる文字搦と
 存命する亦是不思議の幸あるん秋老るるあはれども頃日糧を
 来る賊卒ホが不問語をばく小經任が愛妻文字搦る既は枉死

くけいば経任のく吾侪は逼りて彼愛妾小換んとそのる遠く
 と此のるありと吾侪が死ん日も又遠くくと覚り経任遠く本
 意を遂げ怒りて冠者を殺やせんか身を潔くして死んと
 とも共侶不良人を亡ふの憾ありとて死ぬる身乃のほほまをり
 爰小若くあらまて人ありぬ経任が心の鬼の迎を俟て死や水
 あはまてもあの塹港より脱れぬと遂小寄るの陣は赴死この柵中の
 虚実を告ぐ守まればこのほほまをり御方の兵を導かむそのを
 塹の埋草とともふ怨敵亡ぶべく冠者を救ふとありあらん過世福
 ろく生れ来く女の子乃體を稟くまとも正しく源氏の將帥九
 郎判官の女小しそあると父ハ矢嶋の戦ひ小船八艘が端より端へ飛
 遷りあひとぞ女子も水小入りのあやと荒磯の蟹もたね波乃

底ゆく術を去り給ど一念凝ぶ火中も入り水を涉さぐやハ巴ん父
 判官の信どあひ山城鞍馬の毘沙門天近くを膽澤大明神月来
 念じまら圓通寺の観音菩薩壇今宵は匡ふ力を勦く彼斬取く
 渡させると霎時禱りて外をうち仰死月の影りく推たくまば
 夜も尚二更の比あると賊徒要害を憑りてや夜行るのものと
 掃りあひ起日ぞ吉日なる空小今宵と過さんやと志成勵し
 中をて外面小立ちく水際へ赴んとく又あふかろさあゆても何と
 廣く塹をたぐはる水戯とやんを去りぬ月の不覚小進まら諺小鶉の
 真似ととふ鳥あらん要しとあめと見えりや両三歩上立戻りて押舎の
 門傍は倚りて洗濯盥を引起しあまぞ今宵の渡舟論まら沈め亡
 魂の夢小見せくも寄る小告く終め小誓を亡さんさとして左右の

かけく辛く水際へ引のくちろし。衣乾を竿のよ下ろあゆみ揮取りん。試よ。
 乗と揺動く右ひどり。鹽の中置く糸。身を捨てしそ。浮瀬もあれ。
 南無弘誓言圓通觀世音濟せ身。南無阿弥陀佛。弥陀佛。ここと
 念より岸を突と推せせ。鹽を揺くと漂ひ流とく引る。如く溝門の
 脚を潜りてゆふり。歡とせせ。裏面より見ふ。増る水底
 深うしく。竿立を直徑廣うしく。寄べくもあらず。夜風颯ことしく。
 青瀾藍より蒼く。明月暉ことして。清影玉より白。遙小前の岸と見
 る。小疊上より浪除の石も水より出ると。十尋ゆも餘るべく。いと險う
 ちく。屏風を建てる如く。縦彼知小寄せるとも。ゆめり。攀登ると成
 得べし。さればとく。今更ふ度已べし。あらず。竿を擡りて。水を
 撥んとし。鹽傾れ。眼眩をく。ゆめり。知を遠る。小似るとも。かくまを。小

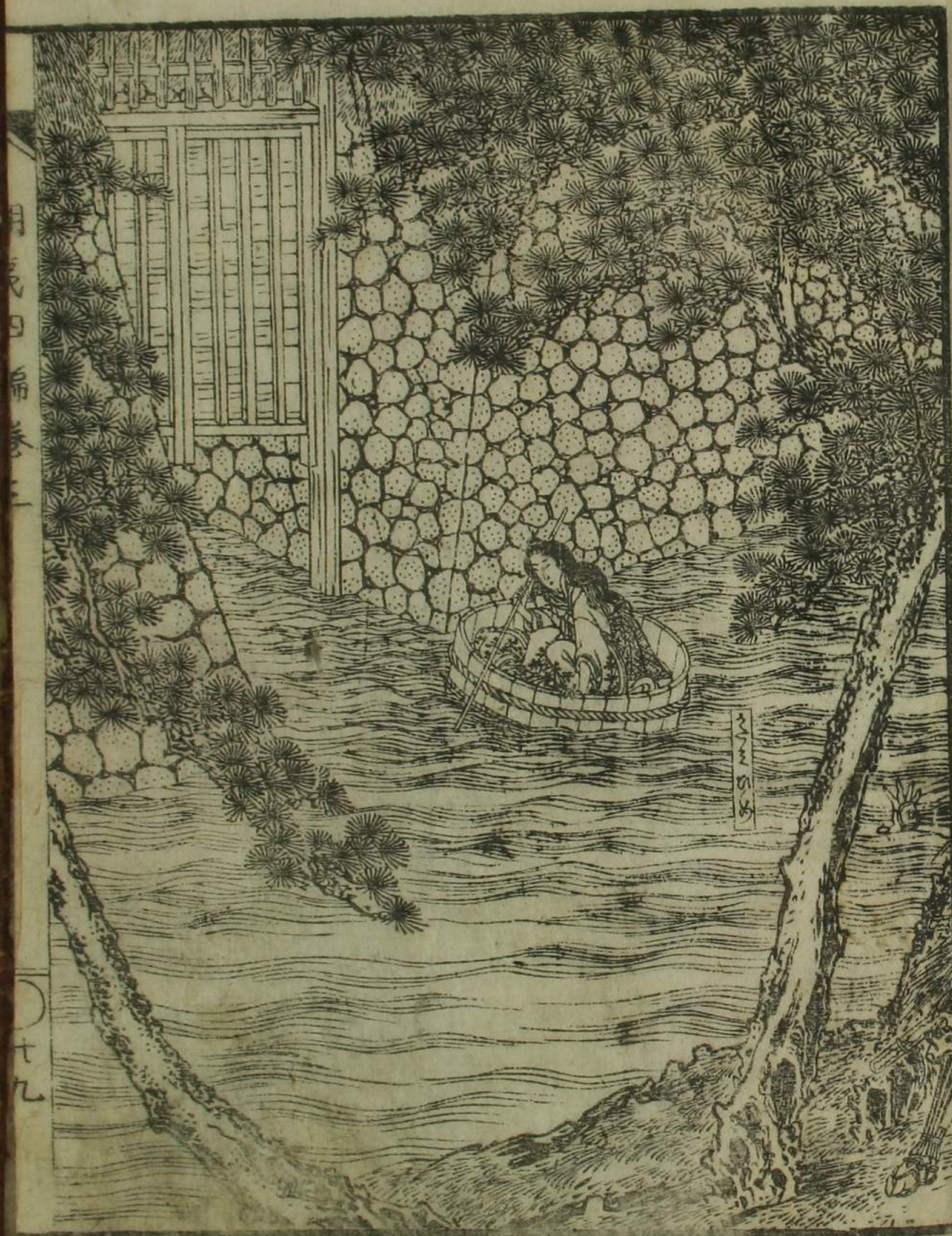
心盡しく。船中脱とせれども。前面より。ゆめり。漂ふ。隨小天の
 明る。更ふ賊徒と捉えん。過世のゆめり。業報ゆめり。良人の人を。よが
 う人を。神佛も護りぬ。進んとする。小舟ゆめり。登りんとする。ふ
 路も。現この岸ハ煩惱あり。彼岸ハ菩提あり。中流あり。物成
 りぬ。餓鬼の苦難もかくぞ。あらず。只あり。ゆめり。沈ん。軟く。の岸のあり
 づ。歌。そもゆめり。せん。と。ゆめり。ゆめり。と。声立と。哽り。泣き。ゆめり。
 かる。折る。前面小人も。編笠を深く。と。ゆめり。齡い。たく。なる。成
 知らむ。身長へ五尺八九寸。六尺ゆめり。や。と。ゆめり。小鼻。蛇皮拷の衣を
 被く。いと。長れと。短け。る。両口の刀を腰み。と。切岸の。葛石。小右の
 足を踏乗しく。と。ゆめり。向くと。立ると。け。姫を。遙は。こ。ゆめり。と。捉を
 たり。賊徒。小知。と。ゆめり。彼。知。ゆめり。人。あ。軟。脱。と。ゆめり。の。伏。兵。と。ゆめり。捉へ

らまゝく又ささ小辱め小ありんより。そと論まんと目を閉て念佛十遍なり
 唱へる。男をよせ監を覆えんとく縁よみ成かけつるが。又思ひ久きやう。
 渠の追隊の賊兵さぶ。その内夥る死小一人立在るんいと不審。等
 公の向き遠くも隈るさ月影小くくんまが賊徒の次女似さる
 のあり。さか神佛の擁護小よりて。それを資る者さる殺それ。あなぬ
 軟たろく小死を急ぐ愚るさん。うや吾侪の仇をさるとも死さる小
 遅死とやある。只天運又任せんと多入ハ怖む驚うむ波乃まふく
 流さるとも吹く風や助けえ。身をむ渡の半を過く前面へ近くまり
 とれどもさ岸をさぶらうさけり。當下彼武士ハ筐姫をさ認めり
 豫く用意やさるけん腰小挟一索をさりゆく水上小投かる小索の
 端小鐘あり。鉤をさ著さる。寛違る。筐姫の體の縁よりち掛く。

まぶく小岸へ引よせり。かくその鉤を外し。此度ハ姫の帯小さるやせ。
 鞍馬の山小ありとみ。番卸さるさん。小いと軽らる小引揚る早技
 力量世間小類さるるべく由ありね。筐姫を夢の中小又夢をさる
 心地さる。吉凶を判し。もさる。只忙然とつらなる。容止をつくと。
 笠の内より透り。こんく。めんが。是吉見冠者義邦の内室をさるや。
 此れその藤園さる。然りて。賊徒の妻妾さるさる。知さる。筐姫小ありす
 やと問さる。僅小頭を擡裏く胸小さる。この人吾侪を助けのせせ。
 善哉悪哉いま。ささるね。隠しとハさる。小あり。を形んと深念し。
 現推量小違ふとさる。吾侪則筈なり。めんがハ又何國の人をさる小
 ささる。ささる。ささる。知り。助けめり。圖さる。ける幸。各告め。と
 向く。も。忘る。さ。点頭の。懐。さ。一管の呼声の笛を探り。ゆく。

澄くくろくまぐ吹鳴せむ斬を距るに遠くく叢立る樹蔭より一個の
 行客走り来り匡姫敬馬死く遠くく見久むその人の年齢廿の久を
 三四かろべし色浅黒く髯青かり花田の袴の夾衣を精悍しく裳折
 寒衣を腰より一口の短刀を跨り足より涅染の脚絆を穿たりその人骨の
 田舎備くこと彼かのぐう甲乙あり件の武士に立形がう彼行客と扱
 け付る要時耳語れしうろ瓜のうく匡姫ふうち對ひ婦人かろくま
 驚くべうまぐ今へは名と告うまぐと遠くくむしと知るべう今宵へ
 特小月明く潜ぶ小便をこころふよすのめく問答究めく危くおんが
 影を隠させんむこの男を俱くいとくといそむば行客へその答とまぞ
 姫のく瓜取り背小引被け足は信しく走去けり件の武士へ木かくそ
 けく要時まろくを目送りし再び岸邊小立りる水は漂ふ大盥し釣

索投り引りきく葛石小繫糸死苗腰より扇を抜出し斬の徑の長短き
 向の岸の高低を瓜のろの中小揣り横さる小運歩く程小暗く
 天も定めろく叢雲忽地月を包く朦朧とろくよけり浩如く袖附
 ざう鎧のう瓜簾小掩り坐す隠く紫金作の太刀を佩細鋒の南蛮虫
 肱甲小筋金入り臙甲せり亦是一個の潜行武者彼もこの斬ふそめて
 遙小右のうろり来りる件の武士へ知らむやありけん行逢の問はひ
 むも忽地礮と撞當ま互小退く西三歩のうろく驛を告とんく
 序よりと吐れり左のうろ立戻らふ又前面より一個の武者打拵似
 ころ菅簾の腰より漏る鎧の威毛輪鐵打り鋒巻を竹子笠小隠し
 てもろ月顯る焼刀の金具さか小耀らる岸の螢秋雲きとの星の影
 欬と疑りる件の武士もこと小懼らる序よりと吐れり右へえせむ



月夜四編卷五

十九

脱 賊 匡
 舟 柵 姫
 残 夜



草夷四編卷五

十九

ありこの武者左へ入せむ。よれこの武者巨臂をむき。詰る。二人信と
 身を固め疾視ありて。諸笠小隔と見えぬ。面影を。こんんとてかく。両
 敵の腕を一度は振ふ。直つて。入る。兵法の極秘彼方も。撓ぬ相撲
 の推ふ小突へ。拂ひ打ぐ。沈む。孰間。一上一下。二人を敵む。小力士の働
 奉乱と。挑む。二人齊一。諸笠小。諸る。瓜うけ。引落さる。袋も。出離れ
 うれ。拂ふ。雲さ。霽さ。洩る。月の影。面を。うつ。なれ。つ。義秀。ゆ。ふ。ら。と。と。や。
 と。向ふ。武者。能。心。成。ゆ。と。ん。と。然。ゆ。ふ。和。殿。を。二。二。廣。光。何。この。武士。が。朝。夷。
 ぬ。致。す。の。ま。ろ。く。と。む。ら。ま。ふ。初。對。面。さ。る。嗣。忠。も。豫。く。ゆ。く。名。を。一。舊。識。
 不思議の。値。偶。と。再。會。小。感。嘆。呼。吸。を。合。せ。け。り。

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之三



